

勝三郎船弁慶

長唄

全詞章

二世杵屋勝三郎 作曲

題名『船弁慶』

別題『勝三郎船弁慶』

けふおもひたつ旅衣、今日思ひたつ旅衣、帰洛をいつと定めん

〔弁慶・名ノリ〕 斯様に候者は、西塔の傍に住居する、武蔵坊弁慶にて候

偕も我が君判官殿は、頼朝の御代官として、平家を亡し玉ひ、御兄弟の御仲、日月の如く御座候べきを、言甲斐なき者の讒言により、御中たがはれ候事、返すがへすも口惜しき次第にて候

然れども我が君、親兄の礼を重んじ玉ひ、ひと先都をお開きあつて、西国の方へ御下向あり、御身に誤なき通りを御敷きあるべき為、今日夜をこめ淀より御船に召され、津の国尼ヶ崎大物の浦へと急ぎ候

〔本調子〕 頃は文治の初つかた

頼朝義経不快の由、既に落居し力なく判官殿を遠近の、道遥かなる西国へ、まだ夜深くも雲井の月、出づるも惜しき都の名残ひとせへばいつきふくむ

一歳平家追討の、都出には引きかへて

唯十余人すすごと、さも疎からぬ友舟に、上り下るや雲水の、身は定めなき習かな

世の中の人は何とも岩清水、世の中の人は何とも岩清水、澄み濁るをば神ぞ知るらんと、高き御影を伏し拝み

行けば程なく旅心、潮も浪もともにひく、大物の浦につきにけり

〔弁慶〕 如何に申上げ候、お恐れ多き申事にて候へども、静を御供にては今の折節、何とやら似合はぬ様に候へば、都へ御帰しあれかしと存じ候

〔義経〕 兎も角も弁慶計らひ候へ

〔弁慶〕 畏まつて候、如何に静殿、御心の内察し申して候、去りながら世の人口も如何に付き、是より都へ御帰りあれとの仰せにて候

静は君の御別れ、やる方なさにかきくれて、涙にむせぶ許りなり

判官あはれと見玉ひて、真に此の度思はずも、落人と成り下る身をこれまで、はるばる慕ひ来れる志返すがへすも神妙なり

去りながらはるばる波濤を凌ぎ下らんこと然るべからず、先此の度は都へ登り時節を待てとの御言葉

弁慶俱に慰めて、唯人口を思すなり、お心かはるとな思召そ

〔静〕 いや兎に角に数ならぬ、身には恨もなければども、それは舟路の門出なるに浪風も、静もとどめ玉ふかと

涙を流し木綿しでの神かけて替らじと、契りし事も定めなや、実にや別よりまさりて惜しき命かな

君に再び逢はんとぞ思ふ

〔義経〕 如何に弁慶静に酒を侑め候へ

〔弁慶〕 畏まつて候

実にげに是は御門出の、行末千代ぞと菊の盃、静にこそはすすめけれ、旅の舟路の門出の和歌、是に烏帽子の候召され候ひて唯ひとさしと進むれば

〔静〕 立舞ふべくもあらぬ身の、袖うち振るも恥しや

〔二上り〕 伝へ聞く陶朱公は勾踐を伴ひ

会稽山に籠り居て、種々の智略を廻らして

終に呉王を滅して、勾踐の本意を達すとかや、功成り名遂げて身退くは天の道と、小船に掉きて五湖に楽しむ

〔本調子〕 斯かる事しも有明の、月の都をふり捨てて、西海の波濤に赴き、御身の科の無きよしを、歎き玉はば頼朝も、終には靡く青柳の、枝を連ぬる御契、

などかは朽ちし果つべきぞ

ただ頼めただ

頼しめじが原のさしも草、我が世の中に有らん限りは

かく尊諱の偽りなくば、頓て御代に出舟の船子共、早友綱をとくくと、進め申せば判官も、旅の宿を出給へば

静は泣く泣く烏帽子直垂脱ぎ捨てて

涙にむせぶ御別れ、見る目もいとど哀れなり、急ぎ御舟を出すべしと、立騒ぎつつ舟子共

ゑいやゑいやと夕潮に、連れて舟をば出しける

〔船頭〕 あら笑止や風が變つて候、あの武庫山樑が嶽より吹きおろす嵐に、此の船陸地に着くべきやうもなし、皆々心中に御祈念候へ

〔船頭〕 如何に武蔵殿、此の舟にはあやかしが付いて候

〔弁慶〕 あ、暫く、左様の事をば舟中にては申さぬ事にて候

あら不思議や、海上を見れば西国にて亡びし平家の一門、各々浮び出でたるぞや、斯かる時節を窺ひて恨をなすも理なり

〔義経〕 如何に弁慶

〔弁慶〕 御前に候

〔義経〕 今更驚くべからず、たとへ悪霊恨をなすとも、そも何事のあるべきぞ、惡逆不道の其のつもり、神明仏陀の冥感に背き、天命に沈みし平家の一類、

主上をはじめ奉り

一門の月卿雲霞の如く、浪に浮びて見えたるぞや

〔知盛の怨霊〕 抑々これは恒武天皇九代の後胤、平の知盛幽霊なり

あら珍らしや如何に義経、思ひもよらぬ浦浪の、声を知辺に出舟の

知盛が沈む其の有様に、又義経をも海に沈めんと夕波に、浮べる雉刀とり直し、巴波の紋あたりを払ひ、潮を蹴立てて悪風を吹きかけ、眼もくらみ

心も乱れて前後を忘ずる斗りなり

其の時義経少しも騒がず少しも騒がず、打物ぬき持ち、現の人に向ふが如く、言葉をかはして戦ひ玉へば、弁慶押隔て打物業にて叶ふまじと、数珠さらさらと

押しもんだり

〔祈り〕 東方降三世、南方軍陀利夜叉、西方大威徳、北方金剛夜叉明王

中央大聖不動の索にかけて祈り祈られ

悪霊次第に遠ざかれば、弁慶舟子に力を合せ

御舟を漕ぎのけ汀に寄すれば、尚怨霊は慕ひ来るを追払ひ、祈り退け又曳く汐にゆられ流れ、又曳く汐にゆられ流れて、跡白浪とぞ成りにける